

「すばふり」

伊東 英俊

別府市恒例の年中行事になった鶴見岳一気登山大会のチェック地点の一つに、本村の天満天神社がある。

この村の旧家である古屋家所蔵の古文書や、地域の事情に詳しい古老の話をもとにして、天満天神社の由来や、奇祭といわれた「すばふり」について考えてみたい。

立石の天満天神社は、豊後国速見郡朝見荘立石村、現在は別府市大字南立石一二五三番地に鎮座する氏神である。祭神は菅原道真で、とおい昔（鎌倉時代）は、立石村内の朝見川の南、字手ノ内に祭られていたと伝えられるが、文明四年（室町時代）に征夷大將軍従一位左大臣源朝臣足利義政の命によって、右京太夫従四位下臣勝元が京都北野天満宮の宝殿として御分霊を奉戴し、現在の場所に上野国義の手によって再造宮されたといわれる。

その百二十八年後、慶長五年九月に豊臣方の大友義統と徳川方の黒田如水との間に歴史に残る石垣原の合戦が起こった。その時天神社の東側の庄屋古屋彦助の屋敷が大友方の本陣となったことはよく知られているところである。この天満社拝殿の天井には、故古屋勝馬氏の発案で、県立芸短大の学生が合戦の有様を描いた、三十三枚の鮮やかな天井画があり、往時の戦いの激しさを偲ばせている。

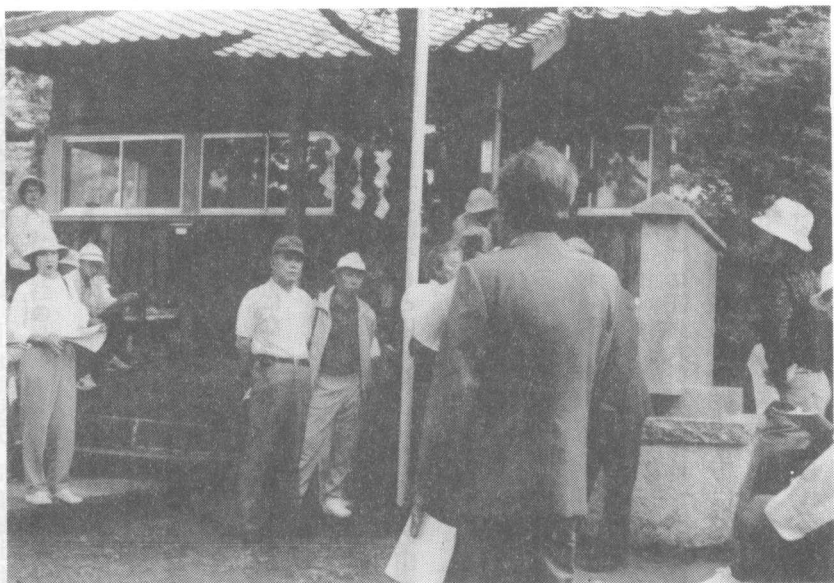
江戸時代になると、立石村は萩原三位兼従の所領となり、神社は萩原氏の外護を受けることとなり社領も定められ社運も隆盛となった。江戸中期明和年間萩原家の中居新左衛門、大角主水、鈴鹿采女、鈴鹿左京などが連署して庄屋古屋作兵衛に宛てた社領状に

天満天神社領田高

七斗七升四合

とあるのはそれを裏付けるものである。

後、立石村は天領になり明治に至るのであるが、江戸時代を通じて古屋家が祠官に任ぜられ（神道裁許状）、天満宮の社地、境内ともに御除地となり、社殿復旧の時



天満社前で説明する筆者

は、御料林の竹木が下賜されていた。尚、境内には享保十三年（一七二八）建立の鳥居、江戸後期奉納の灯笼があり。また社殿の南西には露出する根部の周りが、約二八米、幹部の周り約一米、樹齢一千年におよぶ大楠の御神木が聳えている。この大木の根元の方が空洞になっていて、こどもたちが中で焚火遊びをして危険なため、コンクリートを詰めて塞いだ。神社の裏には文化一四年（二八一八）に、堀田荒金家の先祖四兵衛の奉納による約二反の御神田もあった。

五穀豊穣を感謝する秋の大祭は、毎年旧暦十月二十五日に行なわれる。この日に珍しい「すぼふり」の行事があった。「すぼふり」は、社田を戦後の農地改革で失って、「すぼふり」に使う藁すぼがとれなくなっただけから途絶えてしまったのは淋しい限りである。

古老の話では、この行事は「すぼふり」または「しもふり」という名はなく「森巻き」と呼ぶのが正しいようである。

祭りの日、お宮で神事後、十人の神楽舞によってお

神樂が奉納され、村は祭り一色になった。同時に、一五才から二五才の青年衆は、代々神社総代をつとめていた本組の甲斐さん宅に招待され、酒食の振る舞いを受けた。一方二六才より三十才までのものは中老または長老と呼ばれていたが、その長老や総代、役員たちはお宮で直食を行なって団欒の時を過ごした。

お宮の裏手にある二反の神田で収穫がおわると、「森巻き」に使う二十把の新藁の束を作って境内にある楠の根元に寄せていた。(この楠は今はない)

青年達は、酒の酔いも程よく廻った頃、タオルを首に巻き新しいメリヤスの上下を身に付け、楠の根元に寄せていた藁束(藁スポ)をほぐして、裸足になって柔らかくなるまでその上で暴れ廻った。(スポ振り)

一時間くらいたつと、頃はよしと長老や役員たちはその藁で縄をなつて楠の根っこから立ち上がり、四、五尺上あたりから楠の幹に縄を巻きはじめる。青年たちは巻かせまいとして長老たちの邪魔をする。巻き縄は、七廻り半と決められていて、夕刻五時頃までには双方とも疲れ切つて巻きおわつた。(森巻き)

巻きおわると神主から代表が御幣を戴いて、巻いた縄の上の方に差し込んで立て、「すぼふり」の行事が終了した。

この行事は、神社の氏子を上組(堀田)、中組(本村と板地)、下組(観海寺と中津留)の三組に分けて三年に一回の割で持ち回りにしていた。この行事の目的は、今と違つて青年達は外に働きに出ることもなく、殆どが農業に従事して、これと云う楽しみもなかったため、大人達が盆踊りや祭りを盛大に催して若者達の日々の労をねぎらい、息抜きの愉しみを与えるために配慮されたものであった。「すぼふり」行事は神事とは関係なく祭りを賑やかにする風俗だったと云えようか。

青年達の団結も大変良く、本村の義正団、克己団、親友団、肅正団など多彩な団名があった。

神社の世話をする祠官(神主)にも階級があつて、一番上を大講義(現首藤盛美氏宅)続いて中講義、小講義と称して代々世襲制を採っていたそうである。神道裁許状を受けていたので地域には神道の家庭が点在し、元は御嶽教と黒住教を奉じていたが、寛文年間の頃より御伊

勢教の勢力が強くなって、今では宮総代にご寄進をすると同時に天照太神宮および御嶽権現様のお札が下付されている。

秋の例祭には今でも甘酒が接待されているが、これもお宮とは直接の関係はなく、これはこの地方では秋の取り入れが終わると、各家庭では裏の朝見川の水車で新米を搗いて、鉄輪温泉にあった麴屋に行き、米一升とモロブタ一枚の麴を交換して貰って、甘酒をたてる風習があった。その名残らしい。

これは筆者の身勝手な所見であるが、天満宮には梅が付き物であるがこの社には梅がない。別府市に桜の名所は数々あるが、一つくらい梅の名所があってもよいのではなからうか。折角の由緒ある天満社を町内にもつ所であるから、町民と行政が一体となって梅の植樹を実施して、参道には朱塗の灯籠などを設置して将来天満宮の境内を梅見の一大名所に整備してはどうであらうか。市街地から離れて兎角刺激に乏しい地元本町地区の活性化にも通じ、有意義な事業となるのではなからうか。

なお、昭和六十一年十二月に、京都北野天満宮より「北野天満宮の御分霊を奉体している神社」であることの認証がおこなわれている。

参考文献

天満天神社由緒書（古屋家文書） 別府史談第六号
別府市誌 老歴史家の研究談 新詳日本史図説
天満社碑文

北鉄輪の天満宮にも「もりまき」があった。ここでは拝殿で若者が藁の上で相撲などとして暴れ、その藁で縄をない、神殿うしろの大楠（神木）に巻いた。これは豊饒を感謝して、田の神（ヘビ・水神様）を天に帰す神事であった。無垢の若者が暴れるほど神が喜び、その活力が神の再生に寄与すると考えていた。

また、甘酒もいまでは祭りとは縁遠くなったが、氏子が祭りに際して精進潔斎して酒小屋を建てて神酒を作るならわしがあった。酒は神に供えられ、氏は神と共に飲食をする「直会なほかい」で神酒を戴いた。（編集部註）